

教養小説と植民地

— *A Portrait of the Artist as a Young Man* における語りの「ねじれ」について

道 木 一 弘

I. はじめに

『若き芸術家の肖像』（以下『肖像』と略す）において、ジョイスは『ユリシーズ』を予見させるような実験的文体を試みる一方、ヨーロッパ文学の伝統的形式の一つである教養小説（*Bildungsroman*）をその枠組みとして用いている。¹ *Bild*とはドイツ語で文字どおり「肖像」という意味であり、一方*Bildung*とは「生成」や「育成」といった意味をもつ。この言葉は、教養小説という形式の実質的な起源とされるゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』（*Wilhelm Meisters Lehrjahre*, 1796）において、全一的な人間性と生の総体を意味するようになり、さらにドイツ・ロマン派において、主体による自己完成の無限の可能性を意味するようになった。その代表的な作品はノヴァーリス（*Novalis*, 1772-1801）の『青い花』（*Heinrich von Ofterdingen*, 1802）である。ただし、教養小説は十九世紀の後半には既に時代遅れとなり、イギリス文学について言えばジョージ・エリオットにおいてその終焉を迎えると考えられている。

教養小説の衰退は、理性に基づく啓蒙主義的な人間観が行き詰まった結果であるが、それは見方を変えれば、個人を社会に先立つ自由な存在とみなすことが最早できなくなったことを意味すると同時に、そのような人間

観を普遍的なものとして認めることの矛盾が次第に明らかになりつつあったということでもある。そしてこの二つの問題はそれぞれ帝国主義と植民地支配の問題として捉え直すことができるはずである。帝国主義的な膨張政策はヨーロッパ列強間に絶え間ない武力衝突を引き起こしたが、それは国内のあらゆる階層を帝国の一員として統制する全体主義的な傾向を許容する素地となる一方で、植民地において「文明化」の名の元に推進されたヨーロッパ式の教育は、自国の現実から遊離したコロニアル・エリートを生み出すことになったのである。

この問題は、イギリスの最初の植民地であったアイルランドにおいて一層複雑であった。『肖像』の時代背景となる十九世末から二十世紀初頭、政治的・文化的言説をとおして、アイルランドは未だ文明化されていない野蛮かつ神秘的な「ケルトの国」であるというステレオタイプが繰り返されていた。しかし現実の社会を見れば、既にアイルランド人の大半は英語しか解さず、特に都市部に住む中産階級では日常生活のレベルにおける英国化が進行していた。しかもアイルランドは大英帝国を支える人材の重要な供給源としても機能しており、大学出のエリートは帝国の官吏として、またそれ以外の者も軍人や兵士また官憲としてイギリスの植民地経営に深く組み込まれていたのである。²

文学史的な観点からすれば、既にその歴史的な使命を終えたかに見える教養小説の形式を、ジョイスが二十世紀に入ってからあえて自らの作品の枠組みとして用いた背景にはこうしたアイルランドの置かれた特殊事情、すなわちイメージと現実の間の「ねじれ」があったと思われる。彼は自らの分身的な作中人物として自意識過剰なステイーヴン・デーダラスを設定し、教養小説的な言説を介して彼が現実離れしたイメージの中の住人として成長する過程を描き、コロニアル・エリートの抱える矛盾を作品化したのである。換言すれば、ジョイスは教養小説という形式にアイルランド的「ねじれ」を表象する手段としての可能性を見たはずなのだ。以下、本論では作品の具体的な場面の分析をとおして、この仮説を明らかにしたい。

II. 祖父の肖像が意味するもの

スティーヴンの幼年時代の記憶は陰鬱で、死のイメージに彩られたものである。彼が寄宿生として生活を始めるクロングウズウッド・カレッジは、ジェズイットによって運営されるエリート校だが、中世の城を流用した校舎の薄暗い廊下には戦争で死んだ城主の幽霊が出没するという。しかも最年少で小柄なスティーヴンは、泥にまみれてラグビーボールを追いかける上級生達に怯え、級友達の乱暴な言葉使いにもなじむことができない。挙句の果てに級友の一人から溝へ突き落とされ、それが原因で熱を出したスティーヴンは、医務室に運ばれて自分の葬式の場面さえ空想するのである。

こうした一連の陰鬱なイメージは、最終的に彼が見るある一つの夢へと収斂する。群衆が迎える夜の港へ死んだパーネルの棺が船で到着するという夢である。言うまでもなくパーネル (Charles Stewart Parnell, 1864-91) はアイルランドの長年の懸案であった自治運動と土地問題を一手に引受け、国民党を率いてイギリスによるアイルランド支配を政治的に解決しようとした英雄である。彼が女性スキャンダルに巻き込まれ、その後突然病死したことは、アイルランド現代史における最大の悲劇といっても過言ではないだろう。スティーヴンの見る奇妙な夢は、この歴史的大事件への作品中での最初の具体的な言及なのである。

実際、パーネルの死が当時のアイルランドの人々にどれほどの落胆と混乱をもたらしたかは、この夢に続いて描かれるクリスマスディナーの席上、大人達が激しく論争する場面によって如実に示されている。このときスティーヴンの父サイモンは、壁に掛けられた祖父の肖像を指差しながら、「お祖父さんは本物のアイルランド人だったよ」(38) と言うのだが、³ その理由は、祖父がプロテスタント地主の不当な支配に抵抗を続けながら、カトリックの神父に盲従することもなかったからである。パーネル失墜の最大の原因がカトリックの神父達による裏切りにあると考えるサイモンに

とって、「本物のアイルランド人」であることは、もはや信仰とは無関係な問題なのだ。

従って、スティーヴンがクロンゴウズウッドで体験する陰鬱さと死のイメージは、正にパーネルの死と社会の混乱が、多感な子供の心理において反映されたものと言える。英雄パーネルは幼いスティーヴンにとっておそらく最初の自己同化のモデル (*Bild*) としてあったはずであり、従ってそれが失われたことは、彼にとっても大きな危機であったはずなのだ。父サイモンが指し示す祖父の肖像 (*Bild*) は、いわば失われた英雄の肖像の後のできた空隙を一時的に埋めるべき代替物としての意味をもっていたのだ。

だが、パーネルの肖像が表すものが「自治への希望」であったとしたら、祖父のモデルが体现する価値とは何であろうか。この疑問に対するヒントは、事業に失敗したサイモンが息子を伴って訪れるコークの街で、彼がスティーヴンに対して語る次のような言葉の中に見つけることができる。

When you kick out for yourself, Stephen - as I daresay you will one of those days - remember, whatever you do, to mix with gentlemen. When I was a young fellow I tell you I enjoyed myself. I mixed with fine decent fellows..... We kept the ball rolling anyhow and enjoyed ourselves and saw a bit of life and we were none the worse of it either. But we were all gentlemen, Stephen - at least I hope we were - and bloody good honest Irishmen too. (94) [下線は筆者]

ここでサイモンが「本物のアイルランド人」とは、「紳士」と交わり、かつ自らも「紳士」でなければならないと定義するとき、我々はそこに、幾世紀にもわたってイギリス社会を悩ましてきた問題、すなわち「紳士とは何か」という問の反響を聞くことができるだろう。⁴

周知のように、イギリス文学においてこの問題を正面から取り上げたのは、チャールズ・ディケンズの『大いなる遺産』(*Great Expectations*,

1861)である。この作品は、労働者階級出身の少年ピップが、社会的上昇志向と女性への欲望を、「紳士」になることによって一度に達成しようとする物語である。匿名の人物から舞い込んだ遺産によって、彼は「紳士」への道を歩み始めるが、その過程で自分を育てた労働者階級のジョーを軽蔑するようになり、最終的には遺産も女性も失い「紳士」への夢も挫折する。

ディケンズがこの物語で伝えようとした一つのテーマが、貧しくとも誠実な心を失わないジョーのような「内面の紳士」にあったことは疑えない。だが『肖像』との関連で注目したいのはそのような道徳的なテーマではなく、この小説が的確に捉えた「紳士」をめぐる「欲望のメカニズム」である。すなわち、「紳士」とは「紳士」という言葉に対する強い欲望によって生み出されるということと、従ってそこには常に「紳士」と「そうでない者達」を差異化しようとする欲望がコインの裏面のように存在するということである。

「本物のアイルランド人」たれと息子に説くサイモンの姿を作品化した時、ジョイスの脳裏に『大なる遺産』に見られるこの「欲望のメカニズム」があったことは十分に考えられる。サイモンはアイルランド人の理想像として、ヴィクトリア朝道徳の社会的アイコンともいべき「紳士」を引き合いに出すのだが、この場合も、それが厳密に何を意味するのかということは問題ではなく、せいぜい世俗的な意味での成功を表わす曖昧な記号に過ぎないからである。

さらにサイモンは、「紳士」への欲望がもつコインの裏面として、差異化も積極的に行おうとする。それは、家庭の経済状態が悪化したため、クロンゴウズウッドをステイーヴンが退学した後、次に何処へ入学させるべきかについて彼が語るときである。

Christian brothers be damned! said Mr Dedalus. Is it with Paddy Stink and Micky Mud? No, let him stick to the jesuits in God' s name

since he began with them. They'll be of service to him in after years.

Those are the fellows that can get you a position. (73) [下線は筆者]

“Christian brothers”とは、貧しいカトリックの子弟のための学校に通う者達であるが、サイモンは息子をそのような所へ入れることには断固反対で、あくまでジェズイットの学校に送り込もうというのである。それは彼自身が明言しているように、あくまで世俗的成功を念頭においたためであるが、ここで注目すべき言葉は、“Paddy Stink and Micky Mud”である。何故なら、PaddyもMickyも、イギリス人がアイルランド人に対して用いてきた、歴史的な蔑称だからだ。サイモンは、自らの中産階級の地位を保証するために、そのような蔑称を労働者階級のアイルランド人に与え、よって自らを彼等から差異化しようとするのである。⁵

このように見てくると、ステイーヴンの父が祖父の肖像によって示そうとした価値とは、正にディケンズが『大いなる遺産』で批判した中産階級の上昇志向ということになる。換言すれば、「自治への希望」を体現したパネルが失われた後、イギリス化したアイルランドの中産階級の現実が露骨にその姿を現わしたのである。ここで重要になるのは、サイモンのようなアイルランドの都市部に住む中産階級が、自らをイギリス中産階級と同一化する一方で、同じアイルランドに住む労働者階級を人種的偏見を持った言葉で語ることである。何故なら、この「ねじれ」た自己イメージは、当時のイギリスとアイルランドの関係、すなわち現実の社会でアイルランドのイギリス化が進行する一方で、文化的な言説においては依然としてアイルランドが野蛮な「ケルトの国」として語られる「ねじれ」を反映しているからであり、ステイーヴンの主体形成の過程 (*Bildung*) においても重要な意味を持つからである。

Ⅲ. ザビエルの肖像が意味するもの

祖父の肖像に次ぎ、モデルとしての二つ目の「肖像」(*Bild*) が提示さ

れるのは、ドーラン神父によって不当な体罰を受けたスティーヴンが、クロンゴウズ校の校長コンミー神父の部屋へ一人で直訴に乗り込むときである。校長室へ続く薄暗い廊下で、彼はジェズイット歴代の聖人や偉人達の肖像が自分を見下ろしていることに気付く。その中には「神の偉大なる栄光のために」(*Ad Majorem Dei Gloriam*) という文字を指し示す教団の始祖聖イグナチウス・ロヨラと自らの胸を指して献身のポーズをとる聖フランシスコ・ザビエルの肖像が含まれている。ザビエルの名が再び言及されるのは、ベルヴェディア校で彼の名に因んだ静修が行われるときである。校長は生徒達を前に、ザビエルが自ら進んでアフリカからアジアへと伝道に出かけ、多いときには月に一万人もの異教徒を洗礼したため、洗礼を施した右手が動かなくなるほどであったと語り、次のようにその偉大な情熱を誉め賛えるのである。

A great saint, saint Francis Xavier! A great soldier of God! ... He had the faith in him that moves mountains. Ten thousands souls won for God in a single month! That is a true conqueror, true to the motto of our order: *ad majorem Dei gloriam!* (111) [下線は筆者]

ここには植民地主義とキリスト教という興味深い問題がさりげなく織り込まれている。校長が用いる言葉は、伝道とは「神の兵士」によって遂行される戦争であり、他者の「征服」でもあることを明確に語っているからだ。⁶ 実際ロヨラやザビエルが生きたのはコロンブスの新大陸発見の報に沸くスペインであり、そのコンキスタドール達によってメキシコやペルーが文字どおり征服されていく時代であった。ロヨラ自身、聖職に就く前はフェルディナンド王とイサベラ王女の宮廷に使える兵士であったという(Gifford 153-54)。重要なことはジェズイットの持つこうした「征服者」としての一面が、神への絶対的な服従からの強力な反射として生み出されたということである。ジェズイットのモットーたる「神の偉大なる栄光の

ために」とは、正にこの神という名の「絶対的他者」への服従と、異教徒という文化的・宗教的他者の征服という二重性を含んだ言葉として解釈できるのである。クロンゴウズ校からベルヴェディア校というジェズイットのエリート校においてスティーヴンが受ける教育とは、このようなモットーによって要約されるような目標、すなわち「ジェズイットの主体」の確立を目標としたものと考えられることができるだろう。

このようなジェズイットの教育と先に述べた紳士になるための教育とは強い階級意識によって結びつくことになる。作品の背景となったジェズイットの教育環境について実証的な記述をおこなったKevin Sullivanは、クロンゴウ校へ入学してくる子弟の大半が1829年のカトリック教徒解放令以後に形成されたアイルランドの中産階級出身であり、卒業した彼等の多くは官吏や軍人、また医療や法律関係の仕事についてと述べている(21-22)。このことは1832年の第一次選挙法改正以後形成されたイギリスの中産階級が社会的上昇への強烈な志向性をもち、「紳士」になるために必要な教養を身に付けるために大挙してパブリック・スクールに入学した経緯と平行関係にある。

しかもパブリック・スクールにおいて目標とされたのは、労働を重視し使命感と責任感を持った「クリスチャン・ジェントルマン」の育成であり、さらにはそれを実践できるような健全な身体を培うスポーツ重視の教育(athleticism)であったのだが、『肖像』のクロンゴウズにおいて読者に最初に示されるのは、正にフットボールに熱中する上級生とそれを横目で眺めながら右往左往するスティーヴンの姿なのである。注目すべきは、このようなパブリック・スクールが十九世紀後半から顕著になりつつあったイギリス帝国主義を支えるエリート養成機関として機能した事実であり、アイルランドにあったカソリックのエリート校も同様にして帝国の人材養成の一環を担っていたということである。⁷ 従ってジェズイットの持つ文化的・宗教的他者への征服の情熱が、そのような帝国のイデオロギーの中に取り込まれ、植民地を支配する側の使命感として再発動されたであ

ろうことは十分に考えられるのである。

Ⅳ. 植民地エリートのディレンマ

スティーヴンに提示される祖父の肖像と聖人達の肖像が、それぞれ「本物のアイルランド人」と「ジェズイットの主体」を表し、かつその両者が「紳士」という言葉によって結び付くとすれば、そのような二つのモデルを拒否し、自らを何ものにも束縛されない自立的な芸術家として形成していこうとするスティーヴンの試みは、ヴィクトリア朝イギリス文化の「物真似屋」(ミミックマン)になることを拒否することでもある。⁸ しかしそれは如何にして可能なのか。周知のように彼が最終的に自らのモデルとしてイメージするのはダイダロスという神話上の人物であり、それは浜辺で偶然耳にした彼の名を呼ぶ友人達の声と、そこで目にした鳥のような少女を媒介とするエピファニーを通して獲得されるものである。だがこのイメージは、何も無いところから突然生まれるわけではなく、そこに至るまでの一連のイメージの積み重ねの上に必然的に形成されるものである。一連のイメージとは、デュマの小説に描かれるモンテ・クリスト伯であり、ナポレオンであり、そして何よりもバイロンである。これらの人物に共通するものは既成の枠に収まらない反逆の姿勢であり、行動することへの情熱であり、つまりはそのロマンティズムなのである。

スティーヴンの自己形成が持つロマンティズムは、教養小説が備えている一面であるが、とりわけそれは彼が女性に対して抱く極端な理想化あるいは抽象化の中に見ることができる。そのような女性との出会いが最終的な自己完成をもたらすことを彼は夢想するのである。彼自身やがてこのようなイメージ化された「女性なるもの」を「幻影」(phantoms)と呼び、家族や学校など周囲の人間達が彼に対して期待する様々な社会的役割(Bild)を振り切って、進んでこの「幻影」を追い求めようとする。そして物語が結末に向かう中で、彼はこのイメージ化された女性に向けて漸く一つの詩を完成させるのである。

ここで問題にしたいのは、スティーヴンがこのようなロマン主義化された教養小説の語りを自らの物語りとして採用すること自体の意味である。『肖像』を現代イギリス文学の中におけるコロニアル・エリートを描いた最初の作品であると位置付けるDeclan Kiberdは、植民地における教養小説的な語りの重要性を指摘した上で次のように述べている。

Stephen's weighty self-consciousness has often intimidated readers, who may not appreciate that the portraiture is largely satiric. Joyce is dramatizing a consciousness suffering the over-effects of a recent university education, and immobilized accordingly.... He is a dire example of the provincial intellectual weighed down by the learning of the European literary tradition. (345-46)

カイバードがここで指摘する植民地のエリート教育とヨーロッパ文学の伝統の問題は、*Ulysses*に再び登場するスティーヴンに対してのものであるが、同じことは『肖像』におけるスティーヴンについてもあてはまるとと思われる。何故なら、彼が自らのモデルとする一連のロマン主義的なヒーロー達は、正に新興中産階級という「イギリス的な」家庭環境の中で彼が書物を通して身に付けていったイメージだからであり、何物にも束縛されない「自立的な個の形成」というロマン主義化された教養小説の語りこそ、ヨーロッパ啓蒙主義が生み出した文学形式の一つだからである。⁹

したがってここで問題となるのは、この語りの形式によって自らを作り上げていこうとするスティーヴンの意識の世界と現実のアイランドの間に生じる「ねじれ」である。それは彼の中でイメージされる女性達と、彼が現実遭遇する女性達との間の埋め難い距離として作品中に繰り返し現れてくる。「イメージの中の女性」の最初の例は、モンテ・クリスト伯を裏切ってしまう新妻メルセデスである。父が破産する前、スティーヴンの一家はダブリン郊外に住んでいたが、幼い彼は近所にあった「白壁と庭に

沢山のバラのある家」に当のメルセデスが住んでいると想像し、モンテ・クリスト伯となった自分自身が長い試練の後彼女に再開する場面を夢想するのである。

このイメージはダブリンに移ってからでも継続し、スティーヴンはここでもメルセデスの幻を探し求めるのだが、その挙句に彼が迷い込むのは娼婦街なのである。教養小説の語りの枠組みの中でのみ考えるならば、娼婦との遭遇は男の子が大人になるためのある種の通過儀礼として見なされるかもしれない。だがジョイスの作品世界における娼婦の存在の大きさを考えると、ここに植民地アイルランドの置かれた一つの現実を指摘できるはずである。¹⁰ 娼婦から一方的に与えられるキスに戸惑い、それを「とても耐えられない」と感じるスティーヴンの姿は(104)、「イメージの中の女性」と植民地ダブリンの現実の隔絶を受け入れることのできない彼の姿を暗示すると言えるだろう。

イメージと現実の「ねじれ」を示す二つ目の例は、「戸口に立つ女」とダブリンの花売り娘である。「戸口に立つ女」のイメージは、物語の後半において、ダブリン大学の友人デヴィヴァンの体験談に登場する。行き暮れた田舎道を一人家路を急ぐ彼は、途中、一軒の農家に立ち寄り水を飲ませてもらう。そこには一人の身重らしい若い女がいて、夫は遠くに行っていないから一晩泊まっていけと熱心に勧める。彼は女の誘いを固辞してそこを離れるが、途中で振り返ると女は戸口からまだこちらを見送っていた。スティーヴンはこの「戸口に立つ女」のイメージが、「密かな闇の中で一人目覚め、他所から来た人間を無邪気にベッドに誘うコウモリのような魂」として、結局それが「アイルランド女性の典型的なタイプ」として(186)。そしてそのようなアイルランド人の魂がプロテスタント地主によって孕まされる前に何とか自分が介入し、「今ほど卑しくない子孫を残したい」と切に願うのである(242)。この願いは物語の最後に、アイルランドを離れ大陸へ向け旅立つ彼の言葉の中の「未だ創られぬ我が民族の良心を、僕の魂の鍛冶場で生み出すのだ」という言葉にも形を変えて繰り返

返される。

だが、アイルランドが地主に支配される一人の無知な女であって、彼女を何とか啓蒙しそのような支配から救出しなければならないという言説は、アイルランド文芸復興運動が採用した言説に極めて近い。例えば、イースター蜂起の指導者達の想像力を刺激することになるW. B. イェイツの『キャスリーン・ニ・フーリハン』(*Cathleen ni Houlihan*, 1898)のキャスリーンは、他所から来た人間(イギリス人)に土地を奪われた哀れな老婆であるが、それはアイルランドに伝統的に与えられてきたイメージ(Shan Van Vocht)をイェイツが愛国的なドラマに仕立て上げたものである。しかもこのような文芸復興運動の言説は、正にそれが闘うべき敵とみなしたイギリス帝国主義及びその文化的言説の再生産という側面を持っていた。¹¹ アイルランド人が「感情的な女」のような民族であり、従って「理性的な男」の民族であるイギリス人によって統治されるべきであるという言説がイギリスの植民地支配を正当化する一つの拠り所だったのである。周知のように、こうした人種的ステレオタイプによる政治的・文化的支配のレトリックを一般化するのに大きな役割を担ったのは、マッシュウ・アーノルド(1822-88)のケルト文化論であった。

つまりスティーヴンはヴィクトリア朝イギリスの支配的価値観のミミックマンになるまいと努力しながら、その一方で、その価値観と密接に連動する主体形成の語りの形式(*Bildungsroman*)に深く捉えられているのである。アーノルド自身、ゲーテを敬愛し、その代表的な文化批評 *Culture and Anarchy* (1869)において、カルチャーの目的を「人間性の完成」(perfection of human nature)と定義しているが(69)、それは個人の能力の全一的な完成と、そのような個人の集合体としての理想社会を目指すヘルダーとゲーテに始まる人間形成(*Bildung*)という考え方を彼なりに解釈したものであった(Machann 81)。アーノルドは、当時のイギリス社会が物質主義と拝金主義に毒され、また階級的にも分裂していて国家(State)としてまとまりを欠いていると感じていたが、カルチャーによる「最高の

自己」(best-self)の確立がそのような諸問題を解決し、イギリス社会をあるべき姿に向けて再構築する切り札であると考えたのである。このような考え方と、スティーヴンの夢想する芸術家としての自己完成と彼の芸術が目指す「未だ創られぬ我が民族の良心」としてのアイランドとの間には明らかに共通したテーマがある。それは、自己完成 (*Bildung*) を土台とした民族=国家 (nation-state) の構築 (独立) である。¹²

V. ダブリンの「青い花」

ダブリンの花売り娘とスティーヴンの出会いの場面の分析に移りたい。それは正に、デヴィヴァンの体験談で語られる「戸口に立つ女」が「アイランド女性の典型的なタイプ」ではないかと夢想しながらダブリンの街を歩いている時に起こる。

A hand was laid on his arm and a young voice cried:

- Ah, gentleman, your own girl, sir! The first handsel today, gentleman. Buy that lovely bunch. Will you, gentleman?

The blue flowers which she lifted towards him and her young blue eyes seemed to him at that instant images of guilelessness; and he halted till the image had vanished and he saw only her ragged dress and damp coarse hair and hoydenish face. (187) [下線は筆者]

スティーヴンは一瞬この女の目を、彼がそれまでイメージの中で膨らましてきた「戸口に立つ女」のそれと混同する。しかし我に返って良く見れば、それはみすばらしい身なりをした乞食女であった。ここに空想の女と現実の女との皮肉な対比があることは明らかだ。従ってこの場面は「神秘的な」アイランド女性のイメージがダブリンの街のリアリティーによって打ち砕かれるような、ある意味でエピファニーの可能性を持った瞬間なのである。さらに女が差し出すものが「青い花」であることがこの場面のアイロ

ニーを一層強めている。何故なら「青い花」とはドイツ・ロマン主義を代表するノヴァーリスの教養小説*Heinrich von Ofterdingen*の通称でもあるからだ。とすればこの場面は、スティーヴンと娼婦の出会いがそうであったように、ロマン主義化された教養小説の語りが生み出すイメージの女性と現実の女の隔絶を示すもう一つの例として読めるのである。

しかし、この場面でのスティーヴンの反応に限って言えば、彼にそのようなエピファニーが訪れているとは言い難い。それどころか彼は、花を買う金を自分が持たないことを女に率直に告げ、急いでその場を立ち去ろうとするのである。彼はその理由を、女は彼の目の前で「イギリスから来た旅行者か、またはトリニティー大学の学生」に花を差し出すかもしれない、彼はそんな光景を目にしたくないからと説明する。だがこの部分は次のように解釈することも可能である。すなわち、彼は下層階級の貧しい女によって、自分の姿がイギリス人やトリニティーの学生（つまり支配階級としてのプロテスタント＝アングロ・アイリッシュの子弟）という「本物の紳士」と比較され、その結果自分が「本物の紳士ではない」ことが明確になってしまうことを恐れたのではないか。

このことは、短い会話の中で“gentleman”という言葉が畳み掛けるように女からスティーヴンに対して用いられることから十分推論される。換言すれば、スティーヴンはヴィクトリア朝イギリスの価値観を模倣することを拒否しながら、その一方で無意識のうちに「紳士」であることを求め、しかも自分があくまでもミミックマンでしかなく、「本物」ではないことに苛立ち不安を覚えるのである。

VI. 結 び

本論では、植民地アイルランドで自己形成を試みるスティーヴンが直面する諸問題について考察した。父の家の肖像やジェズイットの聖人達の肖像をモデルにすることは、結局当時のイギリス中産階級と帝国主義的イデオロギーに沿った主体に自らを作り上げてゆくこと、つまりミミックマン

になることを意味する。しかし、スティーヴンにとってそれに代わるような主体の獲得または自己形成は容易ではない。何故なら、正に「主体」や「自己形成」といった教養小説の言説そのものが、植民地のエリート教育によって提示されたものであり、さらにはその教育によって生み出されたコロニアル・エリートとしてのスティーヴンは、自分が「本物ではない」という不安に常に脅かされるからである。ジョイスはこのディレンマを描くことで、教養小説の「語り」の限界と同時にその新たな可能性を開いたのである。

注

- 1 川本静子は『イギリス教養小説の系譜』において、『肖像』のスティーヴンを「芸術家」主人公の一つの頂点とみなしている。また、Weldon Thorntonは啓蒙主義的合理主義に基づく自己形成のレベルでは捉え切れない無意識のレベルを含んだより抱括的な教養小説として『肖像』をとらえている。ドイツ文学を中心に教養小説の発展と限界を論じたものとしては、池田浩士の『教養小説の崩壊』がある。尚、教養小説という日本語訳は*Bildungsroman*というドイツ語の持つ意味内容を十分に反映しているとは言い難い。この問題については、拙論「オスカー・ワイルド—隠喩としての階級とドリアン・ 그레이の消された父」、『英文学の内なる外部』（松柏社、2003）の注を参照して頂ければ幸いである。
- 2 『肖像』以外でもジョイスはこの問題に度々言及している。*Stephen Hero* 67-69 及び *Critical Writings* 164を参照。
- 3 『肖像』のテキストはJonathan Cape 1964年版を使用した。引用文の末尾の数字はそのページを示す。
- 4 この問題をめぐる論争についてはCorfieldを参照。
- 5 ジョイスはアイルランド問題が、人種よりもむしろ階級の問題であると考えていた。Ellmann 237を参照。またFosterも同様の指摘を行っている（193）。
- 6 ツヴェタン・トドロフは『他者の記号学』においてこの問題を詳細に文析している。
- 7 パブリック・スクール教育と帝国主義の係わりについては村岡を参照。
- 8 「ミミックマン」という言葉はV.S. Naipaulの*The Mimic Men*に由来する。Homi K. Bhabhaは植民者（人間）と被植民者（不完全な人間）の一方通行的な関係を、後者による前者の物真似（mimicry）という考え方を肯定的に解釈する

ことで相対化し、ナイポールの作品が描く植民地の絶望的な状況に風穴を開けようとする。

- 9 同様の指摘はNolanも行っている (44-45)。
- 10 『ユリシーズ』で最も長い「キルケー」挿話は娼館が舞台であり、ステイヴンはここでイギリス兵に殴打される。
- 11 ジョイスは『ダブリンの人々』の“A Little Cloud”において、イギリスの読者が期待する「ケルト的」詩人になろうとする主人公を批判的に描いている。文芸復興運動とイギリス文化の相関性についてはDean 48及びKiberd 279を参照。
- 12 換言すれば、ステイヴンはアーノルドと同様、「自立的な主体」と「あるべき社会」というゲーテ以来の未完のプロジェクトに直面していると言える。

参考文献

- Arnold, Matthew. *Culture and Anarchy*. Ed. J. Dover. Wilson. Cambridge: Cambridge UP, 1984.
- Bhabha, Homi K. "Of Mimicry and Man: The Ambivalence of Colonial Discourse." *The Location of Culture*. London: Routledge, 1994.
- Corfield, Penelope J. "The Rivals: Landed and Other Gentlemen." *Land and Society in Britain, 1700-1914*. Ed. Negley Harte and Roland Quinault. Manchester: Manchester UP, 1996.
- Deane, Seamus. *Celtic Revivals: Essays in Modern Irish Literature*. Faber and Faber, 1985.
- Ellmann, Richard. *James Joyce*. Rev. ed. NY: Oxford UP, 1982.
- Foster, R. F. *Paddy & Mr Punch: Connections in Irish and English History*. London: Penguin Books, 1993.
- Gifford, Don. *Joyce Annotated: Notes for "Dubliners" and "A Portrait of the Artist as a Young Man"*. Rev. ed. Berkeley: U of California P, 1982.
- Gilmour, Robin. *The Idea of the Gentleman in the Victorian Novel*. London: George Allen & Unwin, 1981.
- 池田浩士. 『教養小説の崩壊』. 現代書館, 1979.
- Joyce, James. *A Portrait of the Artist as a Young Man*. Ed. Richard Ellmann. London: Jonathan Cape, 1964.
- . *Stephen Hero*. Ed. Theodore Spencer. Rev. ed. London: Jonathan Cape, 1956.
- 川本静子. 『イギリス教養小説の系譜』. 研究社, 1973.
- Kiberd, Declan. *Inventing Ireland*. Cambridge: Harvard UP, 1996.
- Machann, Clinton. *Matthew Arnold: A Literary Life*. London: Macmillan,

1998.

Mason, Ellsworth and Richard Ellmann, eds. *The Critical Writings of James Joyce*. NY: Cornell UP, 1989.

村岡健次. 『『アスレティシズム』とジェントルマン--19世紀のパブリック・スクールにおける集団スポーツについて』. 『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』. 村岡健次, 鈴木利章, 川北稔編. ミネルヴァ書房, 1987.

Nolan, Emer. *James Joyce and Nationalism*. London: Routledge, 1995.

Sullivan, Kevin. *Joyce among the Jesuits*. NY: Columbia UP, 1958.

Thornton, Weldon. *The Antimodernism of Joyce's "Portrait of the Artist as a Young Man."* Syracuse: Syracuse UP, 1994.

トドロフ, ツヴェタン. 『他者の記号学--アメリカ大陸の征服』. 及川馥, 大谷尚文, 菊地良夫訳. 法政大学出版局, 1986.